

研修会のお知らせ  
23ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成27年7月1日発行

2015.7  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみやく 富薬

7号

第37巻  
No.312



ヒオウギ *Belamcanda chinensis* DC. (アヤメ科 *Iridaceae*)

**生薬** ヤカン（射干）秋に根茎部を掘りおこし、水洗後ひげ根を取り除いてから陽乾する。

**成分** isoflavone 配糖体：belamcandin, iridin, tectoridin 等。

**効能** 消炎、利尿、鎮咳、去痰薬として咽喉痛、咳嗽、喀痰、リンパ腫、腫物に用いる。射干麻黄湯などの漢方処方に配合される。



生薬 ヒオウギ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



ヒオウギ属 (*Belamcanda*) はヒオウギ1種からなる単型属で、日本(本州以南)、朝鮮、中国、台湾、インド北部の草原に分布する多年草です。長さ30~40cm、幅約3cmの剣状の葉が茎に扇状に付くことから、平安初期にはあつた檜の薄板をつなぎ合わせて作ったという檜扇(ひおうぎ)と名づけられたと言われていました。夏になると高さ1m程で、上部で分枝する茎先に径5cm程の鮮やかなオレンジ色に暗赤色の大きな斑点のある花を付け、現在でも園芸植物として植栽されています。この鮮やかな色と扇状の葉から緋扇(ひおうぎ)と名づけられたとも言われています。英名のleopard flowerはオレンジ色と暗赤色の大きな斑点が豹柄に似ているためでしょう。蒴果は熟すると開裂し、大きな光沢のある黒い種子は中心軸について残ります。黒い種子と扇状の葉からヒオウギを『本草和名』(918)では「和名加良須阿布岐」、『和名抄』(931-937)では「加良須阿布木」、つまり「烏扇」と記されています。英名のblackberry lilyも黒い種子の塊がblackberry (*Rubus fruticosus*)の果実に似ていることから名付けられました。日本ではこの黒い種子を「ぬばたま」(奴婆珠・烏珠・烏玉・夜干玉など)と云い、『古事記』(712)の2首、『日本書紀』(720)の1首、『万葉集』(7世紀後半~8世紀後半)の80首に枕詞として使われています。掛かる詞は「黒・夜・夕・月・暗き・今宵・夢」などです。

『延喜式』(927)の典薬寮の諸国進年料雑薬には山城国や越中国など13国から夜干の名で219斤9両(約58kg)が収められています。夜干は陶弘景(456-536)が「射干は、方書には多く射を夜(ヤ)と発音してある」と述べていることに因るものと思われます。『和名抄』にも「射音夜」とあります。原植物については『本草綱目啓蒙』(1803)で整理されています。花色について射干は「黄赤色にして紫斑点あり、其紅色のものはべにひあふぎ云。黄色のものは黄ひあふぎといふ。」とし、「花白といふ、これは蝴蝶草にしてシヤガ(*Iris japonica*)のことなり、射干に白花なるものはなし」、また「紫花と云は、是鳶尾にしてイチハツ(*I. tectorum*)なり。」と3種をはっきりと区別しています。現在でもこの考えは変わっていません。

中国においては『神農本草経』の下品に収載され、古くから用いられていたことが伺えます。名前の由来を蘇頌(1020-1101)は「射干は、その形状が茎、梗がまばらで長く、さながら射る矢の長竿のやうだ。」と説明しています。別名も多く『神農本草経』では「烏扇、烏蒲」、『名医別録』(502-536)には「烏嬰」、『本草拾遺』(739)には「鳳翼」、その他「鬼扇」、「仙人掌」などで、李時珍(1518-1593)は「その葉は叢生して横に一面に鋪き、烏の翅や扇などの形のやうだ」と説明しています。

別名が多いことは原植物の混乱にも表れています。李時珍が「陶弘景は、射干、鳶尾を同一種だといひ、蘇恭、陳臓器は、花の紫碧色のものが鳶尾、花の紅のものが射干だといひ、韓保昇は、花の黄色のものが射干だといひ、蘇頌は、花の紅、黄のものが射干であつて、白花のものもやはりその類だといひ、朱震亭は、花の紫のものが射干であつて花の紅なるものは違ふといひ、各々自説を主張するのでいづれに信拠すべきかが問題だが」と述べていることから分ります。恐らく日本の本草書『本草綱目啓蒙』が指摘するヒオウギとシヤガ、イチハツやそれに近い植物などの混同ではないかと推測されます。(村上守一 記)